

留学説明会の報告



東工大での留学説明会の様子

2010年5月31日に、東京工業大学大岡山キャンパスにて留学説明会が行われました。当日は160人収容の講義室が一杯になり、立ち見も出ました。質疑応答セッションでは活発に質問が出て、説明会後も、参加者の皆さんは講演者・パネリストを囲んで質問攻めにしていました。学生の皆さんの留学に対する関心の高さがうかがえました。

詳しい内容は次ページに続きます。

また米国大学院学生会ではこのような説明会を開催していきます。今後の予定は4ページ目をご覧ください。



パネリストの面々

当日のプログラム

- アメリカ大学院留学の概要 (約30分)
説明者： 坂本啓 (東工大 助教)
- 「グローバル化時代のアメリカ理工系大学院」 (約60分)
講演者： 倉林活夫 (ミシガン大学准教授)
- 「アメリカ大学院留学の日常」 (約30分)
講演者： 丹治はるか (ハーバード大学博士課程)
- 会場からの質問に答えるパネルディスカッション (約40分間)
パネラーは上記3人の他に、早川朋久 (東工大准教授)・小野雅裕 (MIT博士課程)・田中崇資 (イリノイ大学博士課程) の3名が参加し、計6名。

目次

留学説明会の報告	1
留学説明会の報告 (続)	2
会長挨拶『重たいスーツケース』	3
イベント案内	4
お薦め本『そうだったのか! アメリカ』	4

ハイライト

- ◆ いよいよニュースレターがスタートしました。設立にあたっての会長の挨拶を3ページ目に掲載しました。
- ◆ ニュースレター編集部では、皆様からの留学体験記、出願情報からお薦め本・映画の情報に至るまで募集しています。興味がある方は4ページ目の連絡先をご覧ください。

留学説明会の報告 (2010年5月31日 @東工大)

まず、坂本助教（東工大）が、アメリカ大学院留学の仕組みを説明。本説明会は「理系」「大学院で学位を取る」ことを話題にするが、他の留学についても有益な情報があるだろうと断った上で話が始まりました。アメリカでは博士課程の学生は基本的に学費免除であるばかりか、給料をもらって学位を目指している、という魅力的な情報の一方、アメリカでは成績が悪いと退学になる、という話もありました。

次に、メインスピーカーである倉林准教授（ミシガン大学）が、アメリカの大学院が持っているビジョンについて説明。日本の大学しか知らない学生にとっては、衝撃的な内容だったかも知れません。



坂本啓先生（東工大 助教）による
大学院留学の説明



倉林活夫先生（ミシガン大学准教授）による「グローバリゼーション時代のアメリカ理工系大学院」についての講演

3人目の講演者は、現在ハーバード大学に留学中の丹治さん。留学中の日常生活について、楽しみに話していただきました。丹治さんのお話を聞いて、ぜひ留学してみたい！と思った参加者が多かったのではないのでしょうか。

その後、留学経験者が前に6人並び、会場からの質問を受け付けました。いろんな経験談が飛び出し、人それぞれの苦労があるのがわかりましたが、考え方の方向性が6人とも非常に似ている、という印象を受けました。留学する人がもともと似ているのか、それとも留学を経験したから似たのか、興味深いところです。パネリストへの質問が途切れなく出て、大幅に時間が超過してしまったので、ひとまず説明会は終了。ただ、終了後も参加者の皆さんはパネリストを囲んで熱心に質問をしていました。

参加いただいた皆さん、そして説明会開催を表・裏で支えて下さった皆さん、本当にありがとうございました。日本という枠にとらわれず、広く世界に学びにゆくことが当たり前になって欲しい。そう願ひ、今後も同様の説明会を継続的に実施して行きます。（坂本）

当日のスライドは

<http://www.mech.titech.ac.jp/~dosekkei/sakamoto/ryugaku/files/>

からダウンロードできます。また、Ustream

<http://www.ustream.tv/channel/ryugaku-tokyotech-0531-2010>

で当日のビデオ録画をご覧いただけます。



丹治はるかさん（ハーバード大学
博士課程）による
「アメリカ大学院留学の日常」

今年もまた、大きなスーツケースを引きずった新入生たちが続々とMITのキャンパスに到着する季節になった。それを見るにつけ、五年前に自分がここへ到着した日のことを、昨日のこのように思い出す。

その日、僕を乗せた飛行機が予定より遅れて空港に着いたのは夜11時過ぎだった。ボストンを未開の地と思っていた母親が、米2kg、味噌1kg、日本製炊飯器、その他諸々の食材調理器具生活用品を持たせてくれたおかげで、両手で引きずる二つのスーツケースは床が凹むのではと思うほどに重かった。タクシーに乗り込み、行き先を問われ、「MIT」と答えるのが誇らしかった。寮に着き、割り当てられた部屋の扉を開けると、足の踏み場もないほどに物が散らかっていて、二つあるベッドの一方にパンツ一丁の白人が寝ていた。MITで最も安く古いこの寮（現在は閉鎖されてしまった）では、一年生はひとつのベッドルームを二人でシェアして住むのだ。彼は握手をしながら「明日片付けるから」などと弁解したが、僕も自室をゴミ処分場のように散らかして暮らしてきた男だ。その後一年間、僕はこのスウェーデン人と快適な共同生活を送ることになる。そして、腹が減ったので何かを食べようとスーツケースを開けたとき、その中で起きていた悲劇が明るみに出た。漂う強烈な臭い、飛び散った茶色いペースト。中に入れていた味噌のバックが、フライト中の気圧差で爆発していたのだ。意気消沈した僕はStudent Centerへ行き、見るからに高カロリーなブリトーを買って食べた。”Welcome to the US”という声が聞こえた。

そもそもどうして、僕がMITへ留学することになったのか。日本にいた頃の僕は、一方で宇宙開発においてどでかい仕事をしてやりたいという大きな夢を持って余し、他方で修士まで出て大企業に就職するという「普通」の道を歩むことへの、若々しい、あるいは青臭い反抗心を密かに抱きつつも、具体的な計画もなく、行動を起こすでもなく、結局は「普通」の大学生活に明け暮れていた。留学への憧れもあったが、それは交換留学や企業派遣で行くものだと思い込んでいて、学部卒業後に学位留学をする選択肢など考えもしなかった。自分を含め世の多くの人間は、周囲に前例がなければ、道が存在することすら気付かないものなのだ。

転機が訪れたのは大学三年の夏、東大の学部を卒業してMITへ留学していた先輩と偶然に出会った時だった。彼の話の一言、一言に、目から鱗が剥がれ落ちてゆく思いがした。そこではじめて、一般の学生としてアメリカの大学院へ学位留学する道があること、そしてRAなどで学費と給料を貰いながら学べることを知ったのだ。五里霧中の暗闇にぱっと光が射した思いがした。僕は深く考えもせず、吸い込まれるようにその道へ歩を進めたのだ。

若さと勢い任せの留学だったから、その後に経験した苦労は大変なものだった。先生には認められず、友達も思うように出来ず、アメリカに着いた日に僕の胸をばんばんに膨らませていた自信は、風船から空気が抜けるようにいとも簡単に消えていった。（その苦労談を「レンガを積むが如く」に書いた。ご一読いただければ幸いです。）しかし、そこか



小野雅裕（おの まさひろ）
大阪生まれ、東京育ち、ボストン在住
MIT 航空宇宙工学科の博士課程

ら頑張つて結果を積み上げ、失われた自信を少しずつ取り戻していった過程で、自分は研究者としても、人間としても、大きく成長できたと胸を張って言うことができる。逆にも僕があの時、ほんの小さな偶然の狂いでその先輩に出会えていなければどうなっていたのだろうと思うと、井の中にいた自分の無知を恐ろしいとさえ感じ、自分をここまで導いてくれた幸運にただただ感謝するのみである。

そして日本にはきつと、未だ出会いに恵まれない大勢の「僕」がいる。彼らはもしかしたら、大きな夢と若々しい反抗心を持って余し、しかした

そこから頑張つて結果を積み上げ、失われた自信を少しずつ取り戻していった過程で、自分は研究者としても、人間としても、大きく成長できたと胸を張って言うことができる。

だ道の存在を知らないがために、或いはただ周囲に前例がないがために、漠然とデフォルトの「普通」に留まり続け、やがて歳を取り、夢と反抗心を「現実」へ埋没させていくのかもしれない。そう考えると僕はじっとしてはいられなかった。あの時にその先輩が僕にしてくれたことを、今度は僕が彼らにしなければいけないと思った。それが、僕が2007年冬と2009年夏に東大にて「アメリカ大学院留学説明会」を催した動機である。それぞれ150人を集める盛況で、数人がそれをきっかけに留学したと報告してくれた時には、僕はとても遣り甲斐を感じた。

しかし一方で、留学説明会が僕の個人的活動に留まっていたら、そのインパクトは限定的なもので終わってしまう、という懸念もあった。たった数人に道を示ただけで終わってはいけないと思った。この活動を時間的に継続し、地理的に拡げていくためには、活動の主体を個人から組織へと移さねばならない。それが、全米の留学生を束ねる「米国大学院学生会」の設立を思い立った経緯である。その組織化の過程で、Mentor ProgramやNewsletterなどの形で留学を支援するアイデアも生まれた。これらの活動によってより多くの日本の後輩たちがアメリカへやってきて、今度は彼らが僕らの側に加わり、次の世代が

海外へ飛び出すことを支援する。そんな、先輩から後輩へバトンが次々と受け渡されていく仕組みが回り出せば、もっともっと多くの元気のよい日本の学生が海外へ飛び出してゆき、そしてそうなれば日本の未来も明るいと思うのである。

五年前に僕が（味噌と一緒に）スーツケースに詰めてアメリカへ持ってきた夢と反抗心は、いくつかの困難を経た後に、さらに大きく膨らんで僕の中に生きている。毎日がワクワク感と疾走感に溢れている。この勢いで走り続けなければきっと後悔のない人生になるだろうという予感がある。この感覚こそが、僕が「米国大学院学生会」の活動を通して、より多くの日本の学生たちとシェアしたいものなのだ。もちろん、学位留学のみが充実した人生へ繋がる唯一の道では決してない。「普通」の道で努力を重ね大きく成功した人も多くいる。しかし僕は、自分が辿ったこの道を、後輩たちに自信をもって勧めることができる。「米国大学院学生会」の活動が、彼らが勇気ある一歩を踏み出すための一助となることを、切に願う。

米国 大学院 学生会

【ニュースレター編集部】

小野 雅裕
原 健太郎
平林 正稔
工藤 朗
大久保 達夫

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、留学体験記や各種のコラムを執筆してくれる方を募集しています。興味のある方は編集部までご連絡下さい。

今後のイベント

お待たせしました！留学説明会が中部、関西地方でも開催されます。この機会に是非どうぞ。詳細が決まり次第、このコーナーでご案内します。

- 12月20日18時予定 早稲田大学
- 12月22日 名古屋大学
- 12月28日15時予定 京都大学
- 12月下旬予定 東京大学
- 12月下旬予定 九州大学

問い合わせはinfosession@gakuiryugaku.netまでお願いします。

メンタープログラムのお知らせ

メンタープログラムでは9月17日から10月17日の期間で留学希望者の方とメンターの方のマッチングを行います。今年度の学位留学をお考えの方は

<http://gakuiryugaku.net/mentor-program>

までアクセスの上、ご参加下さい。

問い合わせはmentor_program@gakuiryugaku.netまでお願いします。

お薦め本 『そうだったのか！アメリカ』 池上彰 著 (集英社文庫)

どうして大統領就任式では左手が聖書に置かれるのか。どうして進化論が学校で教えられることに反対する人がこうも多いのか。アメリカのニュースを見ながら以上のような疑問を持った人は少なくないだろう。また、これらの他にもアメリカのニュースでは日本ではあまり耳にしない移民問題や同性婚が大きく取り上げられることがある。これらの現代アメリカのもつ様々な側面を深く理解するには、日本人にとっては馴染みが薄い合衆国建国の精神や宗教観などの背景知識が必要となる。そのような知識を手軽に得るのに最適なのが今回紹介する本だ。

本書では、アメリカの政治、経済、社会、宗教などの9つのトピックに関して、近現代史を踏まえた説明がされており、ニュースで耳にする事柄を複合的な観点から理解するのに大いに役立つ。著者は元「週間こどもニュース」のお父さん役として活躍した池上氏だけあって、その解説は明快だ。随所にあるコラムでは歴史上のエピソードも紹介され、豆知識も同時に得られる。

これからアメリカに渡る人から、アメリカ生活が長い人にまで幅広くお薦めできる一冊だ。興味が湧いた人は同じ「そうだったのか！」シリーズの他の書籍も是非どうぞ。(大久保)

